

仙洞歌合

乾元二年四月

聖德廣敷 皇極經世
 聖德廣敷 皇極經世
 聖德廣敷 皇極經世
 聖德廣敷 皇極經世
 聖德廣敷 皇極經世
 聖德廣敷 皇極經世
 聖德廣敷 皇極經世
 聖德廣敷 皇極經世
 聖德廣敷 皇極經世
 聖德廣敷 皇極經世

皇極經世
 皇極經世
 皇極經世
 皇極經世
 皇極經世
 皇極經世
 皇極經世
 皇極經世
 皇極經世
 皇極經世

仙洞謔合

乾元二年四月廿九日

題

春風

夏雨

秋露

冬雲

戀夕

作者

左

女房

右

前權中納言平朝臣經親

左近衛權中將藤原朝臣家親

從二位友原朝臣兼行

永福門院內侍

散位藤原朝臣為相

左近衛權中將藤原朝臣範春

右近衛權中將藤原朝臣俊兼

新宰相

從一位友原朝臣教良女

前權大納言友原朝臣家雅

藤原朝臣典侍

入道前太政大臣

延政門院新大納言

從三位源親子

永福門院小右衛督

前權中納言友原朝臣俊光

永福門院中將

九條左大臣女

誦師

讀師

判者

衆議

隱作者各被刺之
前中列云為重
后日書判詞

永隆元年

大德元年

永隆元年

大德元年

永隆元年

大德元年

永隆元年

大德元年

永隆元年

大德元年

永隆元年

一番 春風

左 猪

女房

あすやいよいよのるもあまの夕花小風たちぬ也

右

前持中列云為重朝臣為兼

はなひつら梅や梅のききふそ風をつらきむつき二月

左右奇傳等各可申其難之由被仰下籠似

有感筆未後言于時重自末座可中所有之

由之こそ河汰一番左可貴与之由直方共中

之誠然心深安詞難及尤可為猪之由出さぬ中

侍り交

二書

右持

かろりふ流を担る者りなうくしておぬめる定尔風をせき

右

前持中記云平朝臣陸親
左近衛持中將友系朝臣家親

心とちぬまりてお流ふありて若乃をさけりしうる

左近衛持中將友系朝臣家親

あまこよあひなうくく可為持す一定め

侍りよ幾

三書

右持

從二位友系朝臣兼行

うすかりあてぬ花のうごちぬあはれよるまの風

右

永福門院侍

あまの庭の楓をふきたて木の色しりる若乃夕々せ

為相朝臣申云右歌先多為兼朝臣三出多社

十首尔木出糸の雪をいあしたひよ一ふりしり

松の下陰とくらべて侍りあま似侍りくや流る面影

系らつるよあまよもに中侍りく左為持

四書

左

散位友系朝臣為相

ゆきぬき山の楓乃枝をかりし乃とらふはるささるの風

右持

左近衛持中將友系朝臣兼行

あまの庭の楓をいあひのまを斬の楓乃風をりる

右側をよる。左花葉をよる枝をよる。心とりあり
ふ叶をのよる相おほ申す。比きぬき山乃さる
とよるう。心とりあり。其終を而右花以情
多し。心とりあり。心とりあり。心とりあり。

右書

右持

心とりあり。心とりあり。心とりあり。心とりあり。

心とりあり。心とりあり。心とりあり。心とりあり。

右

新宰相

心とりあり。心とりあり。心とりあり。心とりあり。

心とりあり。心とりあり。心とりあり。心とりあり。

右書

右

心とりあり。心とりあり。心とりあり。心とりあり。

心とりあり。心とりあり。心とりあり。心とりあり。

右

心とりあり。心とりあり。心とりあり。心とりあり。

心とりあり。心とりあり。心とりあり。心とりあり。

七番

左 傍

藤大助を典侍

指よりよこきり花はけきたたて山女りてはまの夕を

右

入道前太政大臣

みちひたごころのなほふまゆりすも花はちまを風もれ

友あ尤も其無き中へ名も心取りて直

よ一中侍かもしよこきり花はさきまもていふこと

口さしるると頼ちかきよ一中人に侍りて傍を

きよ一侍りしめし侍りて

八番

左 傍

近政の侍新太郎

あひさり徳風は流るるも梅を乃侍りて神もあはれ

右

従三位源頼子

若くは柳よあはれもいづれもあはれに風をみそま

名もあはれあはれあはれよわいもいづれもあはれ

とらふつらきよあはれあはれいづれもあはれ

侍りてあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

九番

左 傍

永福の院小倉衛

縁あはれよ庭の柳もあはれいづれもあはれあはれ

右

前侍中助を源朝臣俊光

さそひりてあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

二首を詠ふはさるるのまじりたる也

十巻

友 お 永福の代中將

ふもふを哀わつてきこし此栞よすふふ君のあき丸

お 九條の大臣女

ふもふたやふもふのまをゆを柳をふあはひくまらふ

友 おの極凡ふこと繁よの志く優るるこし

をよこしてゐる物

十一番 夏雨

友 緒 女房

縁ふをの栞乃えささるる文をきしおのうしお

右 為道

秋らまのびりし此まの栞ふらふは栞のあつて風をきま

庭のあま乃こしきよこしよまをこしよし

侍と本と中侍と中侍と始末れ白おらひ

うこまはまるるこしよし

十二番

友 緒 經親

あつちの栞よるる栞もれを軒のあやめよ栞よま

者 家親の代

あつちの栞よるる栞もれを軒のあやめよ栞よま

おのうしおのまをきし

あたげらるる名やと緒のありし

十三番

左 右

並行つ

時をまたいひて言ふ事をして新しき言ふ事ありて

右

内侍

行きのちし木陰より言ひて又こゝろをくひき人の旅人

のよははるゝとていふ言ひをいふ言ひをいふ言ひをいふ

と名やけりて又言ひていふ言ひをいふ言ひをいふ

とていふ言ひをいふ言ひをいふ言ひをいふ言ひをいふ

十四番

左

為相朝臣

晴るる日なりて少くもあはれあはれやさ月より

右 後

範者朝臣

友草れみよりの言ひをいふ言ひをいふ言ひをいふ

たもつたにさしこむ言ひをいふ言ひをいふ言ひをいふ

と許やけりて言ひをいふ言ひをいふ言ひをいふ

十五番

左 緒

後者朝臣

言ひをいふ言ひをいふ言ひをいふ言ひをいふ言ひをいふ

右

範者朝臣

村ありていふ言ひをいふ言ひをいふ言ひをいふ言ひをいふ

あまの言ひをいふ言ひをいふ言ひをいふ言ひをいふ言ひをいふ

不叶や侍と名中侍りて以たる侍

十九番

右 侍

従一位藤原親良女

源朝臣の侍りたる侍りて又立代名所の家代藤原の侍り

右

家雅

少の侍の侍りたる侍りて又立代名所の家代藤原の侍り

侍りたる侍りたる侍りて又立代名所の家代藤原の侍り

侍りたる侍りたる侍りて又立代名所の家代藤原の侍り

十七番

右

藤原朝臣の侍り

侍りたる侍りたる侍りて又立代名所の家代藤原の侍り

右 侍

入道左近大臣

かゝる侍の侍りたる侍りて又立代名所の家代藤原の侍り

侍りたる侍りたる侍りて又立代名所の家代藤原の侍り

侍りたる侍りたる侍りて又立代名所の家代藤原の侍り

侍りたる侍りたる侍りて又立代名所の家代藤原の侍り

十八番

右

新大納言

卯月より日影の侍りたる侍りて又立代名所の家代藤原の侍り

右 侍

従三位親子

侍りたる侍りたる侍りて又立代名所の家代藤原の侍り

侍りたる侍りたる侍りて又立代名所の家代藤原の侍り

やしのくささなりしるはるきよあしゆし者時無
うひささのしゆのゆきや被定侍
十九番

た 勝 小兵衛督

部とまふりもやくるゆるくまはみおのきよしる妻の影

者 倭 支 郷

ら能きなりもあつて女草のみとて浄まふくれのを

名おのきよしる妻のうまたのしゆのゆきよ

をのしゆきよ 勝 竹 村 氏

廿番

右 中 将

やしのくささなりしるはるきよあしゆし者時無

右 九條 左 大臣 女

孫のきよの山姥をねらめてしゆきよのりやる者

言たちのりやる者民部入る者あひひらよし

ああまの藤原朝に中てけううし雲とゆき乃

あのもれこよおの孫あひひらと侍りた

しゆきよのりやる者

廿一番 秋 露

右 女 房

我もかれしるあまのりやる者

右 有 通 氏

よきまひくはなむもりのさむらふしむらひくはなむもりのさむら
たふ詞たみくして隔れ俗く境をわたりて
及ひさきくはなむらふしむらひくはなむらふしむらひくはなむら
括めちぢりしむらひくはなむらひくはなむらひくはなむらひくはなむら

廿二番

た お

鍾親に

あはれまはしむらひくはなむらひくはなむらひくはなむらひくはなむら

お

家親朝臣

色くのおもひくはなむらひくはなむらひくはなむらひくはなむら

あはれまはしむらひくはなむらひくはなむらひくはなむらひくはなむら

あはれまはしむらひくはなむらひくはなむらひくはなむらひくはなむら

おほくはなむらひくはなむらひくはなむらひくはなむらひくはなむら

あはれまはしむらひくはなむらひくはなむらひくはなむらひくはなむら

おほくはなむらひくはなむらひくはなむらひくはなむらひくはなむら

廿三番

た

道弘に

あはれまはしむらひくはなむらひくはなむらひくはなむらひくはなむら

右 務

内侍

あはれまはしむらひくはなむらひくはなむらひくはなむらひくはなむら

あはれまはしむらひくはなむらひくはなむらひくはなむらひくはなむら

あはれまはしむらひくはなむらひくはなむらひくはなむらひくはなむら

あはれ

廿四番

た お

為相約言

秋いたいとおの家も神もたれはたをとりいひいひうりきて

た お

靴者朝臣

芳ふま朝の糸の若ううよとさわらうおのあまをいさ

た 約いひあつてふとたうしくはらやあまをいさ

た お

た お

廿五番

た

倭皇御名

さし海あまのあめさしきあの秋とあまにうりうり

右 勝

新事相

ぶきちまの光のけのとも乃とふぬらうあさちの庭

あつく清らううしううとくこーおちるぬらぬらう

名やあまのあまのあまのあまの庭勝り

た お

廿六番

た 勝

従一位友系御名

夜すまのあまの庭さるれいこまのあまのあまの庭

た お

家雅

むまのあまのあまの庭さるれいこまのあまのあまの庭

た お

志ろふにあらんおあゆむに路なきよし
備付のよし
廿七番

左 勝 蘇大和曲の侍

望しつの子程まさしくゆのまよひなきあぬあふれきてはる

廿八番 入道お左殿大臣

花まつりあふよりぬ神の家あはるこよみ 結ひさあ

む首も無難之上名有宣新う由一回申さ

為替

廿八番

左 お 新大納言

むらあつと吹くあ秋の女廿年みぬいあはあふ

右 後三位親子

秋のちかし吹くぬ朝朝のま葉も所々あふうなる

あ葉も所々あふうなる名中 霞う

あひあふも同じあふもたらしひもくしてあふあふ

あふあふも同じあふもたらしひもくしてあふあふ

廿九番

左 小倉御智

ひつりあふも日よみうなるあふあふもくしてあふあふ

右 後光の

物おりのよしあふもあふもあふもあふもあふもあふも

左のついでに... 右のついでに...

井番

左 持

中 将

うすき... 秋の... 秋の...

凡

九條大后女

きり... 秋の... 秋の...

藤原の... 秋の...

地... 秋の...

清和... 秋の...

廿一番 冬雲

左 侍

女 房

山... 秋の...

右

為 重 卿

みの... 秋の...

左... 秋の...

一... 秋の...

交... 秋の...

し... 秋の...

亦二番

右 持

經 親 公

明... 秋の...

右

家祝朝臣

志之藤とてちの本末忠々々なる志にたゞれる徳世のま

左右同科と申両方とも中仍る藤

廿三書

さお

道りつ

室のつるやまの風の書をして志成るに水なるを乃を

右

内伝

室も又あひのあしはにれぬ書の手の日にしぬる也

ささし書あつれとふとさきと各中し

廿四書

左お

為相朝臣

あしれあつれぬあましつうさつらさるのよし書を静

右

花書朝臣

牛さぬあまの書は今く入言さるるあし書を静

左右又つれぬあつれぬあまの書は今く入言さるるあし書を静

はしりり各中付るお

廿五書

左お

俊書朝臣

吹すもあまの書は今く入言さるるあし書を静

右

我書朝臣

志さつれぬあまの書は今く入言さるるあし書を静

あまの書は今く入言さるるあし書を静

古く書

た お

後一位藤原経子女

ひと村のきつねのきつねとて日影をこゆる遠のよめ

名

家雅

うれて進むきつねのきつねとて歩くるよめ夕日さす

いづももなれしあはれしきつねとて歩くるよめ夕日さす

廿七番

た

藤原朝臣

ふりやぬおやのさねはつらふかこほるよめあはれしきつね

名 緒

入彦前太政大臣

夕日さす花の時のしむよめえきりさるるよめあはれしきつね

おやのさねはつらふかこほるよめあはれしきつね

中侍しむよめあはれしきつねあはれしきつね

おはらふよめあはれしきつねあはれしきつね

亦ハ書
た

新大納言

おあはれしきつねあはれしきつねあはれしきつね

名 緒

後三位親子

おあはれしきつねあはれしきつねあはれしきつね

おあはれしきつねあはれしきつねあはれしきつね

おあはれしきつねあはれしきつねあはれしきつね

亦ハ書

た 緒

小倉衛督

曹原をよこすのありてしして村をさへくしたるは
右 俊光に

志ししは晴やとありし村をぬりたるやきりあるは
右 俊光に

四十番

左 勝

中 将

凡の言はししはわら指しむるをいひしは

右

九条左大臣女

の勢ありし言はししはわら指しむるをいひしは
左 俊光に
右 俊光に
右 俊光に

矢中ゆり

四十一番

左 勝

右 勝

玉榮
多しなるもかたきなりしは

右

右 勝

くまもたひひまをうけしは
左 俊光に
右 俊光に
右 俊光に

四十二番

左

右 勝

とすなり思ひこしむとけられ志重のうきむは候も
右 巻

お説教

流しつゝ思ひこしむとけられ志重のうきむは候も
左 巻

四十三番

左

通

とも言う冬おれ思ひこしむとけられ志重のうきむは候も
右 巻

内付

流しつゝ思ひこしむとけられ志重のうきむは候も
左 巻

右又優よりして勝と移定付り
四十回書

左

為相朝臣

ありけり思ひこしむとけられ志重のうきむは候も
右 巻

靴巻

まらぬとちまの思ひこしむとけられ志重のうきむは候も
左 巻

四十五番

左

後巻

悪書一々むよん思ひこしむとけられ志重のうきむは候も
入

右 緒

新宰相

思ひ流りし心も今よふよふにたゞ面影の夕ぐれの色

たこころをまじりてはるかにこころをよむるを

はるかにこころをまじりてはるかにこころをよむるを

のちをちりてはるかにこころをよむるを

四十の巻

右 緒

後一は原部信女

つくたきいぬあつたよふいぬあつたよふいぬあつたよふ

家雅の

わらぬもよふいぬあつたよふいぬあつたよふいぬあつたよふ

左 緒の心あつて後よおつたよふいぬあつたよふ

はるかにこころをまじりてはるかにこころをよむるを

よふいぬあつたよふいぬあつたよふいぬあつたよふ

四十の巻

左 緒

後ちゆき曲侍

いとしさの心あつて後よおつたよふいぬあつたよふ

はるかにこころをまじりてはるかにこころをよむるを

いとしさの心あつて後よおつたよふいぬあつたよふ

はるかにこころをまじりてはるかにこころをよむるを

はるかにこころをまじりてはるかにこころをよむるを

はるかにこころをまじりてはるかにこころをよむるを

四十八番

左持

新大廻り

いふとて雲はあつていふ乃昔ちらるれよに念がけ

右

送三位執子

思ふとていふとていふは思ふよふとていふとていふ

雲の抱くことほの言ぢるれよにいと俊く

あつていふとていふとていふとていふとていふ

いふとていふとていふとていふとていふとていふ

いふとていふとていふとていふとていふとていふ

四十九番

左持

小呂巻物

いふとていふとていふとていふとていふとていふ

右

俊克卿

今とていふとていふとていふとていふとていふとていふ

左とていふとていふとていふとていふとていふとていふ

中とていふとていふとていふとていふとていふとていふ

さといふとていふとていふとていふとていふとていふ

五十番

左持

中持

うれとていふとていふとていふとていふとていふとていふ

右

九条左大臣

いふとていふとていふとていふとていふとていふとていふ

公も同清おうーくしーとまうーを
得たし九粒のうーくしー優よおあると
清しきよー一回ー中後りお

Handwritten text in a cursive script, likely a continuation of the text on the right page. The characters are less distinct due to fading and bleed-through from the reverse side.

古きもの候はかりしうししむまじやうと
 信じていたれゆつとしに愛よかのあはれ
 逢つきしより一回より中候りて

1770年
 2月
 20日
 江戸
 赤松
 11

110X
 647
 17
 11

